幼児教育に対する期待と不安

太田次郎

現在ほど、幼稚園が大切な時代はないといえる。そのおもな理由は、子どもの数が少なくなったことである。同年齢や近い年齢の子どもと接するという、幼児期になさねばならぬ体験の場が、幼稚園や保育園以外には見当らなくなっている。昔は隣近所にちょっと声をかければ、たちまち子どもの集団ができたし、同じ家庭の中でも兄弟・姉妹で遊ぶことができた。しかし、今はそれがむずかしくなった。子どもの数の減少だけではなく、子どもの生活もかわって、おけいこごとなどに時間をうばわれ、いっしょに遊ぶ時間をつくり出しにくくもなった。

こうして、遊びを知らぬ子どもがふえるおそれがある。さらに、小学校以後の教育では、偏差値という妙なものが横行し、ますます子どもの生活の内容は貧困になりつつある。

この現状を肯定する人は少ないであろう。そして、そのような傾向に歯止めをかけて、子どもに生活をとり戻させる役割をになえるのは、幼稚園ではなかろうか。遊ぶことの楽しさと充実感、それに伴うある種の厳しさを身につけさせるのには、今ではほかにないように思われる。

そう考えると、幼稚園を中心とする幼児教育に対する期待が、今日ほど大きい時代はないといっても過言ではない。

○○○

では、現状はその期待にこたえているだろうか。残念ながら、大丈夫と胸をはっていえる状況にはないように思われる。

幼稚園における遊びの重要さについては、今さらいうまでもないであろう。しかし、遊びを中心とした保育とは、ただ子どもの活動のままに任せて、保育者が何もしない保育ではないし、またもしそんなことをしたら、子どもの遊びは成り立たないであろ

う。さらに、遊びとは、知的な要素と対立するものではない。

こんな当り前のことを、いわねばならぬところに、問題があるのではなかろうか。筆者は、しばしば早期の知的つめ込み教育の弊害を訴え、幼稚園は小学校の予備校的存在になることを防ぐ必要を強調してきた。しかし、そのことは、幼稚園が旧態依然としたままで良いという意味ではなかった。園をとりまくもろもろの環境は著しく変動している。その動きに流されては困るが、それに全く無関心で、伝統さえ重んじていれば事足れりとするのでは、何の進歩もないであろう。

しかし、自由保育とか情操教育とかいう実態のない言葉によって、保育内容の進展がはばまれているような感じがする。そして、妙な聖域意識に守られて、安易な保育がなされることも少なくないのではなかろうか。

○○○

このようないい方が、日常保育に励まれている方々にとって、失礼なことは自覚している。しかし、現在幼児教育のおかれている状況は、甘言をもてあそぶ余裕などないように思われる。

内からは園児の減少による経営の問題が、外からは教育の刷新という名による圧力が、幼稚園をじょじょにしめつけている。こんなとき、保育の目標や内容が明確でなく、ただ漫然と日々を過していたら、内外の重圧につぶされてしまうおそれがある。

毎年夏になると、幼児教育に関する各種の研究会が開かれている。そこへ招かれていくと、どういうわけか積み重ねがなくて、年々、同じことが論じられている感じがする。おそらく、先生方の世代交代が早いためであろうが、そのような状況ではいつまでたっても、保育内容は充実しないであろう。

小学校低学年と幼稚園の一体化が論じられているとき、知的な内容も含めて、幼稚園の方からカリキュラムの提案をするぐらいの気慨をもたないと、幼児教育に対する期待感がみたされないように思われる。

（お茶の水女子大学）